



「千の風になって」 〈前編〉

「千の風になって」作曲・日本語訳の新井満先生と弁護士の上川耕さんは幼なじみ、川上耕さんは同級生の桂子さんと結婚され、3人のお子様にも恵まれた。桂子さんは明るく活発な女性で、命を守ろうと呼びかける社会貢献活動のリーダーをつとめられていた。36歳で乳がんを患い手術を乗り越えるも9年後脳腫瘍を発症、48歳の若さで永眠された。その後桂子さんを慕う人々の文集が発行され、その中で川上耕さんは「私は今、新潟の二人でよく歩いた道を一人で歩きながら桂子がこの世のどこにもいないことの恐ろしさに絶望したり、逆に青空にすくっと立つ木々を見ながら何か桂子の存在を感じ、魂の不滅を信ずる心はこじした心なんだと思ったり、一方では桂子と暮らした日々が何か幻だったような気がしたり、私の心は大地から離され不安定な空中を漂い浮いたままです」とつぶやいていた。新井満は自分のことを深く恥じた。ふるさとの幼なじみが、これほど悲しんでいるのに、お前は一体何をしているのか、自責の念が耳の奥でこだました。沈黙しうなだれるのみで言葉が見つからなかった。

そんな時、その文集に山添明子さんが「1000の風」という作者不明の西洋詩を紹介された。その詩は死者が書いた詩であることに驚いた。なくなった桂子さんが、今、光や雪や雨や風になってゆうつと空をとびまわっている。そのように考えることができればと楽になるだろうか。この詩には不思議な力がある。ギターを持って何度も作曲にチャレンジするがうまくいかずあきらめた。数年後、再び英語原詩を何度も朗読し、ゆっくりまぶたをとじ、表面の奥にかくれている本質、作者が属する世界と宇宙のかたちを知りたいと思った。「答えは風」やっとたどりついた。風とは息、大地のいびき、地球の呼吸、千の風とは大地の地球や宇宙と一体化すること。人間が死ぬとまず風になり、そして生まれかわる。いのちに対する作者の態度は、地球上に共存する生きとし生けるすべての命に対して「よし」と叫ぶこと。絶対的に肯定するのだ。作者はいのちは永遠に不滅、死と再生の話をかこうとしたのだ、と。

30枚作った千の風になったのCDを上川耕さんに送り、新井満は役目を終えた。その後、天声人語で新井満が紹介され、「千の風になって」は世の中に出た。

—— 次号に続く ——

11月行事予定

- 8(日) いどばた会
- 11(水) 停電
(13:00~14:00)
- 22(日) 秋祭り
- 26(木) 食事会

お誕生日

おめでとうございます

- A 様 (67歳)
- B 様 (85歳)



いどばた会

十月四日(日)

勝田英子様のお祝いを、皆さんと一緒にに行いました。国と県からのお祝状・記念品の披露と、職員からお花をプレゼントさせて頂きました。

新入居者様のご紹介

- C 様 (80歳)
- 10/1 ご入居
- 皆様 よろしくお願ひ致します